

原 子朗著『文体論考』

中 島 国 彦

この文章を書くことになり、「文体」について書かれたもの及びそれに関連する書物を数冊、書架から選り出して机辺に置いた。小林英夫、寺田透、江藤淳、吉本隆明、P・ギローなどの著作と『文体論入門』（三省堂刊）といった書物がそれだが、それらを折を見て読み返すようつとめたのは、原氏の「文体」についての考え方を出来るだけ広い視野の中でながめてみたいと思ったことと、本誌の前号の余白に無署名で書いたこの本の「新刊紹介」を自分自身でもう一度対象化してみたからに他ならない。紙幅が少なくなるのを覚悟の上で、三ヶ月前に書きつけたこの本の印象を引用し、その原点に戻ることから再出発したい。

日本の近代詩に対して鋭い考察を続けている原氏が「文体」ということに取り組んでから、確かもう二十年以上になるはずである。本書は『文体序説』（昭42・9、増訂版46・4、新読書社）につぐ、二冊目のこの方面での業績である。前者が氏の「文体」に対する理論編としての役割を持っているとしたら、今回の『文体論考』はその理論を基盤にしたところの、いわば応用編ということになる。が、最近の安易な「文体」認識に

対する批判の意味も含まれているため、読者は本書の端々に氏の「文体」理論の骨格を見ることが出来る、その意味では両者の合一されたものとも考えることも出来る。「文体」ということをしっかり確かめてみたいという人も、本書を通読する中で原氏と一緒に考えて行けるわけだ。

原氏の柔軟で自由な精神のあり方は週日刊行された文学的エッセイ『樹裸記』（昭49・12、新読書社）で実証済みだが、本書も三島由紀夫、伊藤整、有島武郎、岡本かの子を始めとする多数の作家や詩人を対象に、その文学と文体の本質に迫っている。特に氏の「文体」理論の成熟と有機的に関連している点、一種の様式史観ともいえる氏の文学史像へ広がる視点を内部に包み込んでいる点は注目されよう。が、一面その記述のバランスのとれた見事さは本書の長所でもあるが、本書を決定的な起爆剤とさせないカセともなっていないか。柔軟な行文の背後に潜む氏の内面がどうにじみ出て来るかに、今後も注目して行きたいと思う。

こう自分の評言を書き写してみても、文体、文体、といいながらこの一週間「文体序説」「文体論考」の二冊を読み返す中で感じたことが、この短文の中にすでに記されていることに気づく。原氏の考え方が以前にもまして私の中にすっと入って来ると同時に、一つの疑問がより明確な形をとって来たようにも思う。そうした内容についてより具体的な形で確かめることが、私のこの文章の目的となるだろう。

本書を読んで誰でも感じるのは、「文体」についての考えが使

う人によって皆違ふという混乱した現状の中で、原氏の考え方が明解で終始一貫しているという点であろう。原氏のいう「文体」は、一般にいわれる「筆ぐせ」とか、「細部の個性的な表現特徴」や「言語的特徴」などというものではない。「徹底的に作品に即きたい。作家のことは重視したい」という原氏は、文学作品を「思想」というメガネを通さず捉えようとするし、「研究」という名に隠れた「資料ふうの作品の読み方」をも排除する。もちろん、作品の文章を数量的、統計的に処理して事終われりとする安易な態度には極度に批判的である。『文体論考』の中から、原氏の考え方が明解に表明されている部分を二つ引用してみよう。

…作品の意味は、作者のものでなく読者のものでもなく、両者の共鳴によって生れるものであり、最も本質的にいって、文体とは、作者と読者の主体的な創造力の衝撃によって実現するものだ。(一一頁。なお、氏は「創造力」を同じ行文で別の所では「想像力」と書いているが、意識して区別されているのだろうか)

…文体とは、(もしそれをもった作品なら)文章形式をふまへながらも文章をこえ、作家の個性をふまへながらも個性をこえ、作家の意図や意識をとりながらも、それらをこえて、ちからを発揮しているものであり、結局は真の読者(リズール)によって発見され、確認されるものだ。(五五頁)

こうした意見は本書の端々にあるし、今回『文体序説』を読み返してこの思考が原氏の出発時からのものであることに驚きを新たにした。とりわけ、読者の側の主体的な働きかけを重視する視点がいち早く確立されていたことは注目ししよう。これまでの

原氏の仕事の中で「文体」追究が中心的な位置を占めるのも、こうした認識に立てば必然だったといえる。

原氏の示唆的な「文体」の考え方がいきいきとした形で私達に印象づけられるのは、いうまでもなく個々の作家や作品を扱った時である。本書の本論の部分の最初に置かれた「三島由紀夫の文体」は、三島の生前に書かれたものだが、その論調の切れ味の鋭さにおいてやはり本書の白眉であろう。原氏は、三島の文章は美しくらびやかなうまさがあるかも知れないがそこにあるのは「工^{たく}まれたレトリック」であり「ことばの存在感」ではないと論じ、「作者の想像力に立向う読者の主体性、想像力の主体性は必要としない。喚起されもしない」と批判する。三島のエッセイ「私の小説の作法」や小説『春の雪』などに具体的に触れながら、三島が「文体」を自分で作れるものと考えたことに根本的な誤りがあったとし、そこに普遍性を持ち得ない三島の文章の限界を見ようとするわけだ。「緩なす觀念自体が、氏(三島)の想像力から解放された存在それ自体にはなっていない」という認識を通して得られた文体の所有者^{所有者}ではないという結論は、原氏の「文体」に対する考え方からいって必然だし、いかにも緊張感に満ちた発言だといえよう。が、精神の緊張と柔軟さとは決して矛盾しない。私はいここで、この一章を読み返すたびに、あるすき間を感じずにはいられないことを素直に告白して置かなければならないだろう。原氏の論理が明解であればあるほど、私のいうすき間が増大するのは何故か。恐らくそれは、この文章を通して三島由紀夫とその

文学にぶつかっているのが、原氏ではなく、原氏の「文体」でもなく、原氏の「文体」観であるということによる。この一章に現われた緊張は、自己の文体理論を保持しようという緊張であり、批評というものの持つ精神のディアレクティックな緊張とは幾分違うのではあるまいか。私の指摘したいのは、三島を論ずるに当たっては（もちろんその文体を論ずるに当たっても）、三島の考えていることが実際の表現、〈書くこと〉の中でどう対象化され、屈折し、傷つけられているか、つまり三島の美学ではなくもつと生の存在のあり方という総体にまで眼を注ぐ必要があるのではないかということだ。何故なら、三島における「美」の位置にあるものを、私達一人一人別のものとして持っているからである。「読者としての感受性の論理的直観」が大切なことはいうまでもないが、それが文学そのものによって対象化され、おびやかされることもあることを忘れてはならないだろう。真の作者が読者を内部に包み込んでいるように、真の読者は不断に作者の立場に立って自己認識と自己脱却をする存在に違いない。この点に留意しないと、原氏のいう例の作者と読者の「衝撃」という一語は、修辭的過ぎてしまうように思われて来ないか。「衝撃」の内実や構造への言及が余り見られないのも気になる点だ。

私のこうした疑問は、裏返しにすると、原氏の「文体」観が余り表に出ない章ほど、興味深い考察が自然になされているという事実につながって行く。前著『文体序説』では宮沢賢治論がそうした意味で印象的だったが、本書では『或る女』の冒頭部分のヴァリアントを通してその文学の本質に迫った「有島武郎の文体」

の章が、有島の観念ではなく文章の現場から出発し、句読法に眼を向けるなど原氏の資質を生かしたきめのこまかさを見せている。手続きが実証的だからすぐれているのでは決してない。大上段に振りかぶっていない論調や、例えば「文体」ということを全く意識していない駅頭の発車ベルをめぐる山田昭夫氏の指摘を、「すぐれた読者の発見」として組み入れている余裕、柔軟さが見られる点を評価したのである。とすれば、随筆調に書かれた「スタイルの発生―橋梁とベトコンから―」の一章に原氏らしさを見る私の意見も、充分納得してもらえらるだろう。この一文などは、あの魅力的な『樹裸記』の世界とすぐ隣り合わせになっている。

本書でいろいろとなされている原氏の問題提起の中では、やはり例の様式史観への広がりが際立っている。「最近私は個人様式（個性の文体）をこえた時代様式（時代の文体）」というものを、一つの文学史の方法として考えていて、つくりつつ、つくられてゆくものとしての両者の関係を考えている」といった一節に端的に示されている方向は、すでに本誌第四十三集（昭46・1）の「様式史観への試み―現代詩史への一視点―」にも見られたが、本書でも詩や児童文学の世界での様式史観の見取り図が提出されていて眼を引く。この新しい文学史の視点は今後更に深められて行き、三冊目の文体論著作の中心課題になるはずであるが、散文の世界とりわけ小説の世界における様式史観の確立を期待したいと考えるのは、私一人ではないだろう。（一九七六・五・九）

（昭和五〇年一月 冬樹社刊 A5判変型 二四六頁 二二〇〇円）